



中学校保健体育副読本 新版『中学体育実技』の解説 —新学習指導要領改訂のポイントから—〈前編〉 菊 幸一…………… 1
コロナ禍の今だからこそ、授業づくりにおいて考えておきたいこと —小学校体育「なわとび」を例に— 鈴木 秀人…………… 4
with Sports 歩さん 漫画家・イラストレーター…………… 8

体育・保健体育に関する情報や、授業のヒントなどをお届けしてきた『小学校体育ジャーナル』、『中学校保健体育ジャーナル』は、合本となり『体育・保健体育ジャーナル』として生まれ変わりました。小学校、中学校の枠組みを越えて、系統性を踏まえた指導が重視されている今日に対応し、これまでよりもさらに充実した内容で、指導や子どもたちの学びに役立つ情報をお届けしてまいります。

中学校保健体育副読本 新版『中学体育実技』の解説 —新学習指導要領改訂のポイントから—〈前編〉

筑波大学体育系教授 ● 菊 幸一 まく こういち

1 新学習指導要領における改訂のポイント

新学習指導要領の中学校保健体育科では、育成を目指す資質・能力がこれまでの「技能」、「態度」、「知識、思考・判断」から、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」へとそれぞれ変更された。とりわけ体育分野で問題となるのは、「技能」から「知識・技能」への変更と、「思考・判断」から「思考力・判断力・表現力等」への変更であろう。もちろん、これまでも「技能」(できること)と「知識」(わかること)との関係は、「わかってできること」や「できてわかること」といったように密接な相互関係をもつものとして捉えられてきた。また、表現力についても、これまで主にダンス領域においては重要な学習内容として捉えられてきた。

しかし、今回の改訂では、育成を目指す3つの資質・能力の枠組みが「社会に開かれた教育課程」との関連から、変動する社会にどのように生きて働くのが各教科に共通して問われている。したがって、体育実技で扱う各運動領域の知識内容については、技の名称や行い方などの技能につながる具体的な知識が示されるとともに、関連して高まる体力や運動観察の方法などの生涯スポーツにつながる汎用的な知識も示されている。また、表現力とは、言うまでもなく各運動領域に共通する資質・能力として「思考」し「判断」した内容を仲間や他者に伝えたり、表現したりする汎用的なものを指している¹⁾。

さらに、改訂では「カリキュラム・マネジメント」や「主体的・対話的で深い学び」が強調されており、それらは上記の資質・能力を社会に開かれた学びとしてどのように育成していくのかと関連させて考えねば



ならない。ただ、これらのマネジメントや学び（アクティブラーニング）は単なる方法の変更として扱われるのではなく、各教科におけるこれまでの学習観それ自体の変更を迫るものでもある²⁾。このことは、体育実技における学び方の改訂の要点としても押さえておく必要があるだろう。

2 体育実技における改訂のポイント

各運動領域の「知識・技能」（「体づくり運動」では「知識・運動」）では、全体として小幅な内容の改訂に止まっている。いくつか変化したところでは、①「体づくり運動」で現行の3要素である「気づき」「調整」「交流」のうち、「気づき」と「交流」の2要素に内容が重点化されていること、②同じく「体づくり運動」で現行の「体力を高める運動」が、第1、2学年において「体の動きを高める運動」に、第3学年において「実生活に生かす運動の計画」にそれぞれ改められたこと、③「陸上競技」でバトンの受渡しの内容が新たに加わったこと、④第3学年の「水泳」で「複数の泳法で泳ぐこと、又はリレーをすること」が示されたこと、⑤同じく「水泳」の内容の取扱いで、学校や地域の実態に応じて安全を確保するための泳ぎを加えることができること、⑥「武道」の内容の取扱いで空手道、弓道、合気道、少林寺拳法、銃剣道などについても履修させることができるようになったこと、などである。

「思考力・判断力・表現力等」では、「課題の発見」→「合理的な解決に向けての思考・判断」→「表現」といったパターンがみられる。例えば、「体づくり運動」では、「自己」（第1学年及び第2学年）あるいは「自己と仲間」（第3学年）の「課題を発見」し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を「工夫する」とともに、自己や仲間の考えたことを「他者に伝える」ことが内容となっている。また、その他の各運動領域では、その運動特性によって当然のことながら課題は異なるが、自己や仲間の課題を発見し、その解決に向けた運動の取り組み方への工夫（思考・判断）を行い、これを伝える（表現する）ことが求められるこ

とは共通している。

「学びに向かう力・人間性等」では、各運動領域に共通して、例えば、「一人一人の違いに応じた」動きや課題、挑戦、プレイ、表現、役割を「認めよう」（第1学年及び第2学年）したり、「大切にしよう」（第3学年）したりする、いわば「共生」に関わる内容が示されている。また、各領域に「積極的に」（第1学年及び第2学年）取り組んだり、「自主的に」（第3学年）取り組んだりする、いわば「愛好的態度」に関わる内容も共通している。その他、「健康・安全」に対する態度については、「気を配る」（第1学年及び第2学年）ことから「確保する」（第3学年）ことに向けて共通に高めることが求められている³⁾。

3 新学習指導要領に対応した新版『中学体育実技』のポイント（1） —「主体的・対話的で深い学び」との関係から—

これまで述べてきた新学習指導要領改訂のポイントは、「主体的・対話的で深い学び」によって実現される。体育実技の学習では、これを単なる学習方法の問題ではなく、学ぶ主体である児童生徒からみた学習の意味や価値の探究から出発する学習観の問題として捉えることが大切であろう。その意味で、これまでも『中学体育実技』では、「今の力を確かめながら」、「学習の見通しをもって」みんなと一緒に基本的な技能を生かして楽しむ共通学習（第1学年及び第2学年）と「自分に合った運動やスポーツを選び、学習を深めて楽しむ」選択学習（第3学年）とに分けて、主体的な実技学習が実現されるよう学習の進め方を工夫してきた。

新版では、この学習観をさらにバージョンアップするために、「課題を見つける・話し合う・伝える」といった自由記述欄を設けて自分や仲間の課題（長所や短所）を書いたり、話し合ったりしたことをメモしたりして、お互いに伝えることができる紙面構成になっている。このような学習は、先に述べた「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力の育成にもつながり、さらには「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだ

して解決策を考えたり，思いや考えを基に創造したりすることに向かう」⁴⁾ 深い学びを導くものともなる（図1：「課題をみつける・話し合う・伝える」アイコン，実線囲み 参照）。

4 新学習指導要領に対応した 新版『中学体育実技』のポイント (2) —3つの資質・能力との関係から—

新学習指導要領改訂のポイントで指摘した3つの資質・能力を意識した実技学習を行うために，新版では次のような項目が色分けして示されている。

- 1) 「知識・技能」については，「技術を知る・身に付ける」や「戦術を選ぶ・深める」
- 2) 「思考力・判断力・表現力等」については，「ルールを工夫する」や「練習を選ぶ・工夫する」
- 3) 「学びに向かう力・人間性等」については，「マナー・安全・フェアプレイ」や「みんなで共に楽しむ」

例えば，「知識・技能」については，身に付けたい技術や戦術の名称や動き方のポイントが豊富なイラスト



新版『中学体育実技』(学研教育みらい)

※表紙イラストレーション&デザイン
歩 (IMAGICA BRANCH) 本誌p.8 参照



学研 学校教育ネット
『中学体育実技』のサイトへアクセスできます

トや写真とともにわかりやすく解説され，イメージを描きながら「わかる」と「できる」が一体化して学習できるようになっている。また，「思考力・判断力・表現力等」を促すための「ルールの工夫」については，自分たちの力に合うようにルールを工夫することからゲームなどの行い方の例を示し，自分たちが，今，持っている力でゲームを楽しむことによって学習課題が主体的に見いだされることを目指している（図1：「ルールを工夫する」アイコン，実線囲み）。

※次回は新版『中学体育実技』活用のポイントなどを掲載予定です。

【参考文献】

- 1) 菊幸一 (2017) 学習指導要領の改訂とその要点①-総則改訂の主旨と保健体育との関連-. 保健体育ジャーナル, 112: 1-6. 学研教育みらい.
- 2) 松下良平 (2019) 思想なきアクティブラーニングを転換する. 体育科教育, 67 (11): 13-17. 大修館書店.
- 3) 菊幸一 (2018) 学習指導要領の改訂とその要点②-体育分野における改訂の要点-. 保健体育ジャーナル, 113: 1-7. 学研教育みらい.
- 4) 中央教育審議会 (2016) 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申). pp.49-50.

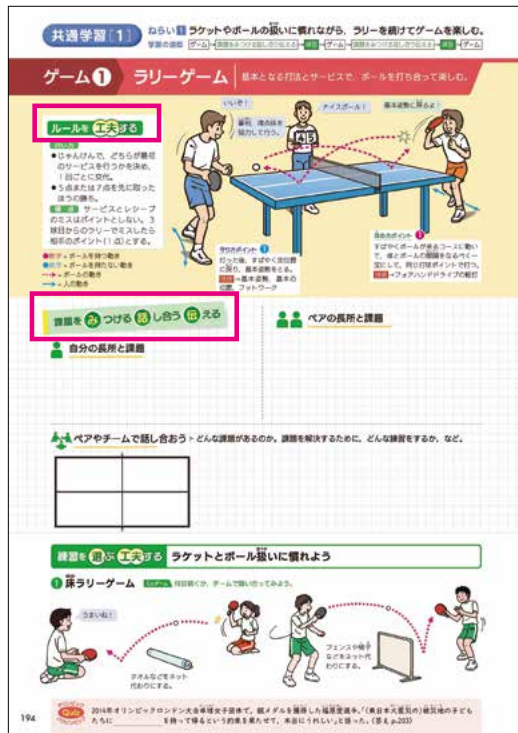


図1 新版『中学体育実技』p.194 卓球
(上段左「ルールを工夫する」, 中段左「課題をみつける・話し合う・伝える」)

コロナ禍の今だからこそ、 授業づくりにおいて考えておきたいこと

— 小学校体育「なわとび」を例に —

東京学芸大学大学院教授・鈴木 秀人^{すずき ひでと}

1 はじめに

コロナ禍の今、体育授業の現況には明らかにある方向性が見えるように思います。それは、感染を防ぐための用具の消毒、密を避けた参加人数の制限、ソーシャル・ディスタンス（ソーシャル・ディスタンシング）を確保した運動の行い方等々、具体的にどうすればよいのかを巡る方法論ばかりが先行した授業づくりの隆盛というものです。

もちろん、この未曾有の緊急事態へ授業者として具体的にどう対応するかを考えることは大切です。けれども、こういった授業づくりの結果として、実際の授業では子ども同士が関わらない「なわとび」のような個人種目ばかり、集団種目はボールに群がらない「ベースボール型」が花盛り…といった状況も見られるようです。

授業をつくるという教育的営みにおいては、具体的な方法論ばかりが先行すると、子どもたちの学習が貧しいものになってしまうことが多々あります。特に体育の場合、身体を動かす運動が学習活動の中心にありますから、方法論の先行は、ともすると、教師が子どもたちを「どう動かすか」に授業づくりの焦点が矮小化される危険性を常に孕んでいます。そこでは、子どもたちが何を学ぶのか、この授業では何を目指しているのか、といった授業づくりの眼目がないがしろにされてしまうのです。

2 改めて、体育とは何かを考えてみよう

新型コロナウイルス感染症の世界的広がりの中、突然の休校措置によって、昨年度末の授業は消滅してしまいました。また、今年度も当初の授業は停止、再開された後も、体育では水泳の授業を行わないことになり、多くのボールゲームも密を避けるということで授

業から消えています。これでは、体育の授業で子どもたちは何を学ぶのか、そもそも体育の授業は何を目指して行われているのか、あいまいであると言わざるを得ません。そういったことを体育に関わる者が問わないうまま、ただ感染予防のための方法ばかりを検討するならば、極論すれば、感染のリスクを背負ってまで体育の授業はしなくてもよい、といった「体育不要論」にもなりかねません。

コロナ禍の今だからこそ、体育とはどのような意味を持った教育的営みなのかを、方法論の検討の前に、改めて考えてみる必要があるではないでしょうか。

3 体育の固有性・独自性

そこで、体育とは何かを考える手がかりとして、この教科の固有性・独自性を確認してみます。他の教科と比べてみると、体育だけが人間と運動の関係を問題にしています。国語が人間と文学の関係を、音楽が人間と歌を歌うことや楽器を演奏することの関係を取り上げるように、それぞれの教科には、我々人間との関係を問う独自の対象があります。体育の固有性・独自性はまず、この人間と運動の関係を問題にしている点に求められるといえるでしょう。

ここでいう「運動」は、ウォーキングやジョギングから制度化された競技種目までを含む、楽しみや健康を求めて行われる身体活動の総体、つまりよくいわれる「生涯スポーツ」という言葉が指す、最も広い意味での「スポーツ」と同じ意味で使っています。そして、この運動とは人間にとって何かを問うならば、その答えは「文化」であるということになります。

先に見た国語や音楽をはじめ、それぞれの教科の授業は各々が対象とする文化を子どもたちに伝えていく役割を担っていて、体育の授業では、運動という文化を子どもたちが学んでいるわけです。注意が必要なのは、ここでの文化は、かつてのような高尚なものに限



られるそれではなくて、「社会を構成する人々によって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体」(大辞林, 2006) という現代的なものです。体育で取り上げられている運動も、そういった文化の1つなのです。

4 運動という文化の本質

さて、このように文化を捉えると、それはさらに、人間が生存を維持するために必要な工夫として生み出した農耕作業のような文化と、そういった直接的な実用性を持つ手段的工夫のレベルを超え、それ自体の中に喜びや楽しさを求めて行われる自己目的的な活動の工夫として生み出されてきた文化に大別されます(佐伯, 1981)。

では、体育で取り上げる運動はどちらに入るのでしょうか。学校教育においてはしばしば、「体力をつけるために運動をしよう」といわれるように、あたかも運動を前者の文化のように扱ってしまいがちです。しかしながら運動は後者の文化、すなわち「それ自体の中に喜びや楽しさを求めて行われる自己目的的な活動の工夫として生み出されてきた文化」なのです。

この理解については、人間と運動を巡る歴史を遡ることによって確かめることができます。現在行われている種々様々な運動は、古くから人々の生活の中に存在した、何かを投げたり蹴ったり棒状の物で打ったりする遊びが、やがてサッカーやラグビーをはじめとするボールゲームに発展していったものと、狩猟や戦闘に見られるような、生きていく上での必要から生み出された技術が、ある時期にもはや必要性が失われたにもかかわらず、その身体操作自体が目的化して、柔道や剣道やレスリングなどの格闘技、あるいはアーチェリーや弓道などの射的競技に発展していったようなものの、大きく二つに分けて見ることができます。どちらにせよ運動とは、人間が自らの身体を動かしてそれを行うこと自体が目的となった(自己目的的)活動という点に、文化としての本質があるということになります。

今回のコロナ禍の中で数多くのアスリートがいろいろな発言をしていましたが、その中でサッカーの日本代表を務める長友佑都選手のコメントは、このような

運動という文化の本質をまさに適切に言い表していました。彼は、このコロナ禍において「サッカーは生きるためには必要ない」けれど、「でも、幸せになるためには必要だ」と述べていたのです(NHK, 2020)。これはサッカーだけでなく、運動全体に当てはまります。つまり人間が行う運動は、ただ単に生きていく上でもなくともいいものだが、運動があれば私たちの生活がより豊かになるという文化なのです。

体育とは、そういう文化を子どもたちに伝えていく教育的営みなのです。子どもたちがそれへ関わることを制限されている今だからこそ、教師が考えるべきことは、そういう文化の本質を伝えていく授業ではないでしょうか。

5 文化としての運動を教える

ここからは、これまでに述べてきた運動という文化の本質を伝えていく体育の在り方を、コロナ禍において、ソーシャル・ディスタンスをとりやすい(?) からか盛んに行われている、短なわとびの授業を例に考えてみます。

ポイントは、以前から行われてきたような、体力づくりの手段としてなわとびを行わせるのではなく、なわとびという運動「それ自体の中に喜びや楽しさを求めて行われる自己目的的な活動」を目指して、なわとびに固有の面白さを子どもたちが味わえるような授業づくりを考えるということです。したがって授業づくりの第一歩は、その面白さを明らかにすることになります。

なわとびという運動の起源ははっきりしていないものの、英国では古くからホップの蔓つるを使って遊んでいる記録があるそうです(榎木ほか, 2005)。おそらくは、植物の蔓や日用品として作られていた縄を振り回して跳んでみた遊びが、だんだんと発展していったと思われる。

つまり、この運動は縄を回すことによって生まれる空間で、縄に引っかからないように自分の身体をどのように動かすかの追究が面白さの核になっていて、そこから多様な跳び方がワザとして生み出されていったものと考えられます。そしてその跳び方は、1回の跳躍における縄の回旋数、交差や身体の横で回すなどの



腕の動かし方、両足だけでなく片足やかけ足等々の足の動かし方の3つの要素の組み合わせで無数に生まれます。

このようななわとびは、ある空間で自分の身体をどのように動かすかの追究が面白さである点は器械運動と同様ですが、上述の3要素を組み合わせることになり容易にたくさんの跳び方を行うことができるので、マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動に比べると、運動が苦手な子どもでもできるワザを持ちやすいというよさがあります。その利点を生かすと、単元の最初は、今自分ができるワザを4つ組み合わせて連続技を作るという学習課題が考えられます。例えば、前回し（5回）→交差とび（5回）→あやとび（5回）→二重とび（5回）といったものです。

同じ4つのワザも、組み合わせの順番を変えれば難易度が異なりますから、別の連続技として認められます。学年に応じて組み合わせるワザを3つに減らしたり、1つのワザの跳躍回数を増減したりといった工夫をすれば、小学生から大学生まで、なわとびという運動の面白さを味わえる学習を導くことが可能です。

その後、自分がまだできない跳び方の中からできるようになりたい単技への挑戦も加えて、新たにできるようになったワザを取り入れることで連続技のバリエーションはさらに豊富になっていきます。また、図1のような短なわをとびながらの回旋の方向転換も習得すると、前回し系のワザと後ろ回し系のワザを組み合わせた連続技もつくれるようになります。

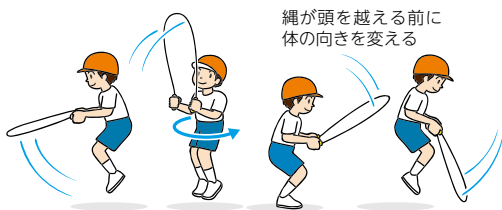


図1 方向転換（後ろ回し→前回し）

6 授業づくりを考える順番

筆者が勤務する大学には全国各地から学生が来ていますが、その多くが語るなわとびの授業経験は、決してこれまでに述べたようなものではありません。それらは、1分間に引っかからないでどれだけ前回しを跳べたかとか、二重跳びで連続何十回跳べたかといった

ようなもので、縄を回すことによって生まれる空間で自分の身体をどのように動かすかの追究という運動の「質」ではなく、どれだけなわとびを跳ばせるかという運動の「量」が授業の在り方を決める基準になってしまっています。

そういった実践の結果が、体育で経験した運動の中で、なわとびは持久走と不人気種目の首位を争うということになっていると思われます。そういった授業づくりの問題の自覚がないままに、いくらソーシャル・ディスタンスを工夫したなわとびの授業を考えても、なわとびという文化の本質を子どもたちが学ぶことはないわけです。

そういった意味では、コロナ禍によって少々混乱してしまった授業づくりを考える取り組みの順番を、言わば逆転させてみることをお勧めします。つまり、まず感染予防のあれこれを考え、それに合わせた運動の行い方をさせようとするのではなく、その運動に固有の面白さを教師がしっかりと把握し、それを子どもたちが味わっていく授業の在り方をいろいろと考えた後で、感染予防への配慮を検討するという順番です。

筆者は毎年いくつかの地域の公立小学校へ出かけ、タグラグビーの単元第1時間目の指導を行っているのですが、今年はある学校で、ボールは使わずに、さらにゲームは行わないで、タグラグビーの指導をしてくれと言われてしまいました。感染対策に神経質にならざるをえない状況は十分理解できるのですが、こういったリクエストが導かれる根本には、文化としての運動を教えるという認識の欠落も感じられます。体育では、適度に身体を動かせられればそれで事足りるとする見方ともいえるでしょう。

7 長なわとびの実践について

先に述べた運動の「量」の確保が優先されてしまう現実には、なわとびの場合、短なわとびより長なわとびの実践により顕著に見られるのではないのでしょうか。長なわとびといえば、連続何十回跳び続けられるかが定番ようになってしまっているからです。

短なわとびは、身体を動かす空間を自分が回す縄で生み出しますが、長なわとびでは、他人が回す縄によって生まれる空間でどのように身体を動かすかの追

究がその面白さの核になっています。例えば、縄が跳ぶ人へ向かって上から下りてきて地面をたたく「かぶりなわ」では、よく行われるように斜めから入って1回跳んだらそのまま前へ抜けていくだけでなく、図2のように、跳ばないで通り抜けることもできますし、跳んでから入った側へ抜けることもできます。

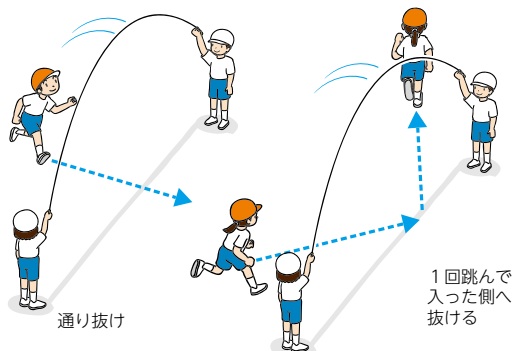


図2 かぶりなわのバリエーション

また、長なわ2本をクロスさせて回すと、図3①～④の4か所の入口があって、跳んだ後の出口も4か所ありますから、合計で4×4の16通りの出入りのパターンが考えられ、それぞれ難易度が違います。

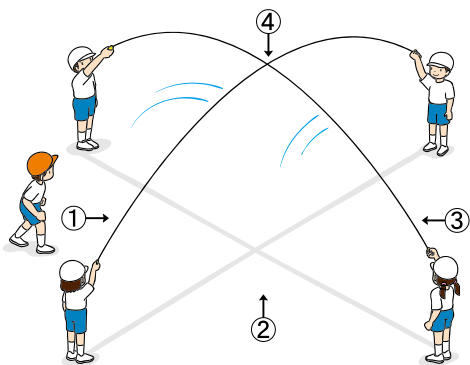


図3 長なわ2本のクロス跳び

ただし、①の入口から入れば長なわ1本のかぶりなわと同じ要領で跳べるので、長なわ2本の学習課題としては、よく行われているダブルダッチよりもこのクロス跳びのほうが子どもたちにとっては取り組みやすいものです。

コロナ禍の中、短なわとびが盛んに行われているのに対して長なわ跳びは、従来行われてきた多人数での連続跳びが密の回避からでしょうか、あまり見かけないようにも思います。密を避けるという発想ではなく、長なわとびの面白さという視点から実践を再検討してみる、今はよい機会といえるかもしれません。さらに、長なわとびと短なわとびを組み合わせた跳び方

もあります。図4のように、長なわとびを跳びながら、短なわとびを跳ぶというものです。慣れてくれば、長なわを跳びながら交差跳びや二重跳びも可能です。

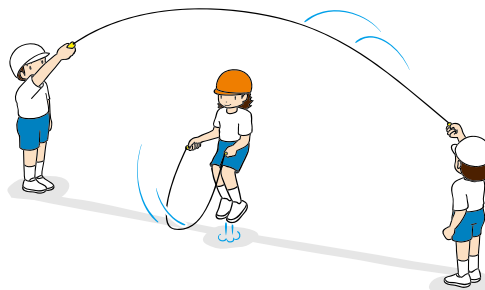


図4 長なわとびと短なわとびの組み合わせ

ここでは、他人が回す縄によって生まれる空間と自分が回す縄で生み出す空間が重なり合う中で、身体をどう動かすかに面白さがあります。そこには、連続何十回跳び続けられるかといった実践とは全く違う世界が広がっているのです。

8 まとめにかえて

先の長友選手が述べたように、運動は「生きるためには必要ない」文化です。運動がこの世になくても、生物としての人間は生きていくことはできます。しかし、当たり前のようにすることができたそれが、今回のように当たり前ができなくなったとき、多くの人はいそれが持つ文化としての本質に気が付いたのだと思います。

それは決して体力をつけるためとか、社会性を育てるためとかにするものではなく、人間が運動を欲するのは、運動「それ自体の中に喜びや楽しさを求めて」いたのだということです。その文化を享受することが制限されてしまう厳しい環境の今だからこそ、全ての子どもに対して提供される体育の時間が、その文化の本質を伝える役割を果たすべきではないでしょうか。

【参考文献】

- 1) 佐伯聡夫「文化としてのスポーツとその指導」勝部篤美・桑野豊編. コーチのためのスポーツ人間学. 大修館書店. 1981, pp.203-242.
- 2) 榎木繁男・岡野進・和中信男.誰でもできる楽しいなわとび. 大修館書店. 2005.

(イラスト：立岡 正聡)



歩さん | 漫画家・イラストレーター、IMAGICA BRANCH代表

女子バスケットボール部を舞台に、努力や衝突を重ねながら仲間同士が心を通わせていく高校生たちの物語を描いた漫画『BREAK THE BORDER』を連載中の歩さん。主人公の揺れ動く心情や、バッシュやシュートの音が聞こえてきそうな躍動感を細やかなタッチで描く。自身の青春時代の経験を基にした構成となっており、歩さんに作品を通して伝えたいことを聞いた。

取材・文／荒木 美晴

2016年、宝島社が主催する第7回「このマンガがすごい！」大賞最優秀賞を受賞した『ECHOES』。高校の女子バスケットボール部を舞台にしたこの作品で、歩さんはデビューを果たした。現在は、その長編版である『BREAK THE BORDER』を自身が運営するサイトで連載するかたわら、バスケットボール女子日本リーグの「Wリーグオールスター」のポスターやグッズ制作、教育関連の媒体表紙を手掛けるなど、多方面で活躍している。



Wリーグオールスター
2019-2020
キービジュアル

歩さんとバスケットボールとの出会いは中学3年のとき。実は、小学校低学年から特定の場所で話せなくなることがあったが、漫画史に残る名作『SLAM DUNK』を読んだことで、高校ではバスケットボール部に入り、心身を鍛えてそれを克服しようと前向きになれたそうだ。ただ、入学は半年近く先だったことから、まずは幼い頃から好きだった絵でバスケットボールに触れてみようかとキャラクターを描き始めたことが、漫画家としてのルーツとなる。

高校では、未経験者の歩さんを仲間が快く受け入れてくれた。共にボールを追いかけ、声を出していくうちに、いつしかチームメイトと自然に話せるようになった。「スポーツの力」を実感し、いずれ絵の道に進むという夢に、スポーツにも携わりたい、という新たな思いが加わった。ただ、この3年間はバスケットボールに夢中で、絵は描いていなかったという歩さん。自分の夢に改めて向き合うことになったのは、専門学校を卒業し、ゲーム会社のデザイナーとして働いていたときのことだ。

「20歳の頃、会社から帰る途中に、ふと『あれ、ずっとバスケ漫画のことを考えているな』と思ったことがありました。振り返れば、専門学校生のときも通学中に登場キャラや物語を頭の中で膨らませていたな、と。それでようやく、『そうか、これが一番やりたいことなんだ』と自覚したんです。ストーリーは中学生の妄想から始まったものだけれど、不思議なことに、自分が大人になるにつれて、漫画のキャラクターたちも頭の中でイキイキと成長していました。『これはもう描けるな』と、ストンと腑に落

ちた瞬間を今でも覚えています。それを具現化したのが、『ECHOES』です」

そこからの行動は早かった。地元・北海道から東京に拠点を移し、新しい会社でデザイナーをしながら作品づくりに没頭。出版社に持ち込みをし、編集者のアドバイスを受けつつ、『ECHOES』を完成させていった。本格的なネームづくりやキャラクター設定のブラッシュアップ、賞レースのため短編に軌道修正する苦労などもあったが、歩さんは漫画家として確かな第一歩を踏み出したのだった。

それから4年、歩さんが大事にしていることがある。それはクリエイターとして「リアリティ」を読者に伝えることだ。「例えば、『BREAK THE BORDER』ではボールが体育館に響く臨場感を意識しますし、いろんな個性や体型の子を描いています。バスケ界に多いハーフの選手も今後登場させる予定です。また、主人公の青は自分の“性”について悩む高校生として描いていますが、トランスジェンダーとして生まれた僕自身の経験を反映させています。“多様性”がメインテーマではないのですが、スポーツはいろんな人に開かれた場であってほしいし、日常生活で何かと戦っている人に、読んでもらいたいと思っています」

最近ではスポーツのイラストを依頼される機会も増え、絵を描く、表現するという形でスポーツに携われるこの仕事にとっても魅力を感じている、と笑顔で語る歩さん。最後に、学生のみなさんにこんなメッセージを寄せてくれた。「何でもいいので、ぜひ一生懸命になれるものを見つけてほしいですね。それが将来につながることもあるし、どうか自分の気持ちや好きなものに、正直にいてください」



PROFILE ● あゆみ

1988年生まれ、北海道旭川市出身。2016年、第7回「このマンガがすごい！」大賞最優秀賞を受賞したバスケットボール漫画『ECHOES』で漫画家デビュー。現在は、同作の長編版である『BREAK THE BORDER』を自身のスタジオIMAGICA BRANCHの看板作品として連載しながら、グッズ展開も手がける。また、スポーツ分野を中心としたイラストレーターとしても活動中。

学研・教科の研究 体育・保健体育ジャーナル 第11号

『小学校体育ジャーナル』(通巻98号)
『中学校保健体育ジャーナル』(通巻124号)

令和3(2021)年1月発行

発行人…甲原洋 編集人…木村友一 発行所…(株)学研教育みらい デザイン…宮塚真由美 表紙オビイラスト…丸山誠司 印刷所…(株)廣済堂

- お問い合わせは、「小中教育事業部」へ 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8 学研ビル 内容については▶TEL. 03-6431-1568 (編集) それ以外は▶TEL. 03-6431-1151 (販売) 「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp/>
- 「体育・保健体育ジャーナル」のPDF版および電子版は、WEBページから。

